

P2

## 言語とジェスチャーの進化：複製特徴を捉える

ドノヴァン・グロース  
(恒生管理学院 [香港])

### 要旨

本研究は、言語とジェスチャーとの間の関係という長年にわたる謎に対し、進化論の観点からの分析を試みるものである。Jablonka & Lamb (2014) や Ritt (2004) に基づいて、言語やジェスチャーの進化は、個体群の中に現れる複製特徴の頻度の増減という形で定義される。複製特徴であるかもしれないものを見出すためには、伝達モードによらずに観察できる以下の四つの判断基準を用いる。すなわち、(1) 個別の文脈や発話ごとに変化することなく安定であること、(2) 個体群どうしの間では差異があること、(3) ひとつの個体群の中で、伝達や学習によって増殖すること、そして (4) 増殖の際に他の複製特徴と競争すること、である。本発表は、おおむね形態論の範囲に収まるような複製特徴を対象を絞り、反応規範という考え方をを用いて複製特徴を二つのグループに分ける。反応規範とは、一つ一つの特徴が、形式・意味のいずれかの点で許容する変異の幅に関する概念である。音声言語や手話言語の語彙的形態素や範疇機能的形態素も、そしてエンブレムのような様式化されたジェスチャーも、複製特徴として認められるための判断基準を満たすものであって、その形式は固定されており（すなわち反応規範が狭く）、一方でその意味は柔軟である（すなわち反応規範が広い）。これらの特徴は、シンボルとして機能するものであるが、何らかの意味で図示的である場合も、まったく恣意的である場合もある。これらの特徴は、創造的に意味や機能を拡張させて使うこともできるため、時を経て進化する可能性が大いにある。一方、本発表で区別するもう一種類の複製特徴は、形式の柔軟性が高い（すなわち反応規範が広い）が、意味が限定されている（すなわち反応規範が狭い）ものである。このグループに含まれるものには、指差しや、実際の事物を指す図示的なジェスチャーのほか、手話言語に現れる要素としては、代名詞、一致や方向表現に関する標識、類別表現などがある。これらの表現では、その形式面での柔軟性が、そのまま有契的かつアナログ的に意味とつながっていることが多い。つまり、形の差異が意味の差異に予測可能なやり方で直結しており、これらの複製特徴がエンコードできる意味自体は限定されているのである。例を挙げると、類別表現に現れる音韻論的な動きも、エンコードできる情報は空間内の道のりや移動の様態、物の物理的な形状などに限られている。形式面で柔軟な複製特徴は、きわめて可塑的であり、反応規範の範囲内であれば複製特徴の基本的性質を変えずに様々な文脈であらゆる意味をエンコードすることができる。それゆえ、形式面で柔軟な複製特

徴は、形式面で固定された複製特徴に比べて進化が遅い。言語的な複製特徴とジェスチャー的な複製特徴は、二つの方法で区別できる。まず、言語的な複製特徴はその機能面での反応規範が比較的狭く、文法体系の中で起こる相互作用の結果として生じる制約の範囲内に収まる。一方のジェスチャー的な複製特徴は、そのような制約を受けず、機能面での反応規範がとても広い。第二に、本発表に関連する範囲では、形態論的な言語的複製特徴は、音韻論的・統語論的・意味論的複製特徴の集合体が全体でひとつの複製特徴として振る舞うのに対して、ジェスチャー的な複製特徴は、単一の、それ以上小さな部品に分けることのできない複製特徴である。

#### 参考文献

- Jablonka, E. & M. Lamb. 2014. *Evolution in Four Dimensions: Genetic, Epigenetic, Behavioral and Symbolic Variation in the History of Life*. Cambridge Mass: The MIT Press.
- Ritt, N. 2004. *Selfish Sounds and Linguistic Evolution: A Darwinian Approach to Language Change*. Cambridge UK: Cambridge University Press.